

琉球過去の文化と教育

平内房次郎

一 序説

由來、小島國の文化は其の附近の、より發達した大國の文化に影響され、若くは殆ど全く Japans upon する事は、誰も認むる事實である。予の述べんとする琉球の文化がまさしく其の一例である。此の國の史的發展の迹を辿るまでもなく、唯地圖を展べて其の海洋上に流虬のやうに横はつてゐる位置を一瞥しただけで、北から日本の、西から支那の文化が潮のやうに流れて來て、茲で撃ち合ひ混じあい、融けあはねばならん運命を持つて

ゐる國たることが點頭ウツヘかれる。假令日支兩屬と云ふ奇妙な過去の政治的關係を知らずとも、地理的關係の上から見ても其の文化が日支兩屬であつたらうとの推定がなし得られると思ふ。果然、予が始めて此の島を尋ねた時、眼底に映じ來る、諸々の事象は皆、此の推定の誤りなき事を證せしめた。試みに昔も今も此島の文化の入口である那覇港頭に立つて港内を一瞥する。汽船や發動機船の間に南支那の沿岸によく見る龍船やんばらせん（山原船と云つてゐる）と和船とが靜かに泊つてゐる。そこを又南洋の島々にでも見出されるやうな列舟くりぶねが點々と動

いてゐる。今を代表した汽船發動機船に對照して和船、山原船劄舟やんばらせんくりふねが琉球の昔の夢を物語つてゐるかのやうに思はれる。此の五種の舟の混在してゐる茲こゝ、那覇の港は琉球の文明を象徴的に現はした光景ではあるまいか。歩を移して街頭に立つ。薩摩出の商人の店にならんで、支那でよく見る藥舖ヤオウの *opium* な招牌が目を惹く。宇治の玉露を販いてゐる葉茶屋に對して清明茶シレミンチヤンペン、香片を賣る支那の茶商がある、東京蕎麥の招牌があるかと思へば麪館兒コウブルに客足の劇しいのを見る。若し夫れ島人の集まる市場に至らんか。南島の烈日を避ける大傘の下に物並べて賣つてゐる様は嘗ては支那領であつた安南東京アナムトウキョウあたりの市場そつくりの支那式であるが、堆かく積まれた反物にも薩摩仕込のものが多いのに氣がつく。更に轉じて士族の家を見やう。取圍んだ石堀から門の構へまで支那式だが神茶壘カマドの門神の繪像のかはりに京都でよく見る建仁寺

あたりから配つたやうな諸佛御守護、武運長久、國家安泰等の文字ある呪符が貼られてある。襖ふすまでたて切つた壘かまどの室に床の置物、掛物は支那式のあぐどい物で、至る所に聯などもかゝつてゐる。家廟を覗くと神主はづらりと昭穆位置を正して並んでゐるが高祖考、高祖妣などの文字ではなくて我等の佛壇に見る何々禪定門、何々禪定尼乃至大居士大姉とある。首里の王城こそは此小王國が如何に支那化に努めたかの昔の面影を偲ばす最大の遺跡があつて、城門も正殿も客殿の一つもすつかり支那式の建築であるのに薩摩の使者役人を接待する一屋だけは、すつかり日本式にしたと云ふ其名殘が今も尙残つてゐる。歴史にも日支兩様の公選の國史がある。中山世鑑は日本の中古文でかいたもので中山世譜は前者に基いて漢譯補正したものである。全く我が古事記對日本書記の關係のやうである。人名も日支の二通り。例へば羽地朝秀はねぢあさひでが日本

名で向象賢しやうじやうけんが唐名である。神社について云ふも、社壇、雨壇の跡や文廟、武廟、天妃廟（是は南支那の沿岸地方に行はるゝ海上安全の守護神）土地宮コノ（農神后稷）などあるかと思へば、熊野権現や八幡宮、天満宮の古い社もある。芝居を見ても支那風のオベラ式に江戸の音曲や踊の分子が混入してゐる。蘇州の楓橋を偲しのばす迫持式サグヒマシの目鏡橋が日本風の板橋に對抗してゐる。支那流に橋記を彫つた碑文を讀むと竊惟夫橋者自古有之云々と堂々と書き出した漢文だが、裏面には此橋成就之時御奉行何某何々共召列しんれつ初而彼通候事。此橋之普請仕候石細工千二百十八人に有之候事。などと是も日支兩様。最後に支那人をして當國飲茶法の觀察を述べしめて日支混合の例證を終らう。曰く「茶甌黃……甌上有朱黑漆木蓋、下有空心托子、甌頗大、斟茶止二三分、用菓一小塊、貯匙內、此學中國獻茶法、若彼國享茶法、以茶末中略入碗、沸水半甌、

用ヨ小竹帚コノ攪カ之、起沫、滿甌面爲度、以敬客コノ」琉球史略見るべし。我が抹茶の法が支那の獻茶法と並用されてゐたのを。此の外極端にまで厚葬の風ある墓の作方や、風水見や、火酒や、豚の飼養や、支那輸入の事物と思はるゝものを舉げ來ると果てがない程あらうが、しかし日常生活の基調をなしてゐるものは此國固有の風俗習慣と内地輸入のそれらの混合したもので、支那事物は概して支配階級の表面生活を飾る *over-tone* に過ぎなかつたやうに思はれる。是より少しく琉球文化の由つて來る所を探つて此國の教育發達史の背景を明かにせよう。

二、琉球文化の史的概観

體質の類似や古い言語、風俗、習慣、傳説の類似、さては地理上の位置などから推定して、日琉同祖説が多くの學者によつて是認されてゐる。從

て内地との交通は太古以來のことであらう推古の御代既に我に朝貢した事が史上に見えてゐる。平安朝の政綱弛廢と共に朝貢も絶えてしまつたらしいが交通だけは依然として行はれてゐた事は我が萬葉集に比すべき此の國の「ちもろおさうし」〔西暦十三世紀の初頃から十七世紀の中頃まで殆ど四百年間の琉球固有の歌を千五百有餘首集めたもの〕に「……くすぬきはこので。(楠船を作りて)やまとぶねこので。(大和船作りて)やまとたびのぼて。(大和の旅に上りて)やしろたびのぼて。(山城の旅に上りて)かはらかいにのぼて。(死買に上つて)てもちかいにのぼて。(品物買ひに上つて)……」云々の歌があるによつても想像される。十四世紀の頃になつて内地は南北朝の戦亂があり、自國では中山、山南山北の三部に分立して戰國状態に陥つたので内地との交通は中絶してしまつたが島津氏の勃興以來それに來貢するやうに

なつて、再び内地との交通が頻繁になり出した。轉じて支那との關係を見ると隋の大業元年(七世紀の初)始めて隋使がやつて來た。越えて五年目に兵を送つて侵掠してゐる。元の忽必烈も招諭侵掠兩方の試みをしたが人民を百人許、虜にして還つたに過ぎなかつた。明の洪武十六年(西暦千三百八十三年)太祖が三山に諭示して兵を戟めしめた。中山王先づ明に歸服して其の冊封を受け、他の二王亦之に倣つた。やがて中山山南の二王率先して王弟王子を明の大學へ留學さす程になり、明からは福建人三十六姓を此の地に移植して、航海通譯等の役に當らしめた。那覇港の一角に久米村と云ふのがある。是れが彼等三十六姓の居所として賜はつた所で、爾來續いて其の子孫が住んで來た。此の久米村こそは琉球の支那的文化の源泉地であり、同時に學校教育の發祥地である、十五世紀の頃、尙巴志なる一豪傑起つて三山は統一せ

られるやうになつてから、明の懷柔策、益々其の効果を現はし、支那に對する親善の傾向、愈々強くなつて來た。是より支那の文物制度はどしどし輸入された。明の永樂帝の時に冊封使が來て爲に天使館を建て、接待するなど厚遇に至らざるなく永く範例を清末時代まで殘した。當時の琉球は我が大化新政時代の唐朝心酔の有様に似てゐる時であつた。しかし、一方、日本との關係も應永二十三年に足利氏と島津氏とに貢獻しだしてから、づつと續いてゐる。足利義教の時代に島津忠國の戦功に酬ゆる爲め琉球を興へてゐるのを見ると此の時から明かに日支否薩支兩屬の國となつてゐる事がわかる。

しかし琉球人の兩者に對する態度は異つてゐる。薩摩と支那との文化や富の高下の差を知つてゐる彼等は薩摩に對して其の權力の下にこそ屈服すれ、支那に對する如き信服の態度ではなかつた。

是の傾向は維新前後までかはらずに續いた。其も其筈、薩摩よりは取らるゝ一方であるに反して支那は寧ろ與へる方であつた。朝貢の物品はほんの形式に過ぎずして、支那に遣はす留學生使臣の厚遇や冊封使の齎らす帝王の賜物は驚くべく潤澤であつた。況や支那貿易の利益の莫大なものがあるをや。要するに明清を通じて支那は夷狄の歸服信順を以て泰平治世の象となし、極力綏撫施恩に努めて中國の自尊心を満足させてゐたらしい。薩摩に比してあまりの差異ある此の大國の襟度に服し、其の文物制度を模倣せざるを得なかつたのは當然である。明治の初年廢藩置縣の際、内務大臣、松田道之氏が使命を奉じて琉球に至り、爾今兩屬の關係を絶對に廢することを宣言諭告した時、一部の島人は支那との關係を支那に無斷に絶つは累代受けた天朝（支那をさす）の恩義に背くとの理由で、どの位ひ手古摺らしたか。琉球見聞録と云

ふ書に當時の嘆願書や談判の大意が書き取つてあるが、其の中には一部人士の考として「自今支那への進貢慶賀並彼の封冊を請候儀被差止候ては親子の道相絶候も同前累世の厚恩忘却信義を失中事にて必至と胸痛仕」云々の如き文句が隨所に發見される。明清を通じて殆ど七百年來、浸潤して來た支那の懷柔政策の利目が此の書によつて目に見るやうに想像される。

こんなわけ故、薩摩の高壓の手かゆるみかけるとすぐに貢獻の船が絶えかけんとするのは當然である。慶長十四年の琉球征伐は此事を證して餘りある事件である。此征伐によつて尙寧王は擒へられて薩摩に運ばれ、其の不在中に琉球の政府は薩摩人の手によつて全然改革されてしまつて、是より事實上全く薩摩の有となつた。但し、貿易の利を占めんがために表面はやはり支那に屬する事を許し置いた。冊封使が來る時は琉球在留の薩摩武

士は僻地に姿を隠し假名字の招牌さへ外さしたと云はれてゐる程、薩摩の勢力を支那の使臣の目から隠さうとした。漂着した唐人の滞在中は大和唄を一切の人に歌ふ事を禁じた程であつた。左の布令を見ても當時の事が想像出來やう。

泊村え漂着唐人被召置候付、右木屋附近は勿論泊村道中又は家内にて、大和歌謠仕間敷旨被仰渡置候、然處去四日之夜新石邊にて謠致、木屋近邊迄も相聞候由甚不勘辨之至に候云々

序でに如何に幕府時代に薩摩が琉球を思ひのまゝに壓伏支配してゐたかを想像するに餘りある一證據を舉げて讀者の想像に訴えて置かう。

「太守様御名、薩摩守様御實名重豪公と奉稱候間、豪の字は勿論、唱同様之實名相用候者は可致遠慮候云々」
 「今度於 御本丸御誕生之 姫君様御名萬壽姫様と奉稱候、萬壽と讀候名、並に外之文字にて萬壽と唱候名は末々迄も遠慮可仕

候云々」

薩摩の「太守様袍袴輕く御仕舞被遊候」ても御祝申上げ江戸の「芝の御屋敷御類焼」遊ばされても御見舞の挨拶に行かねばならん程の密接なる關係を薩摩藩と持つてゐたのであるから、如何に琉球の爲政家が支那を慕い支那を仰いで或は留學生を送り或は福州に公使館を置いて支那との交際に努め、其の文物を取入れることに勉めても、とても日本の文化的勢力には打勝てなかつた。現に残つてゐる古文書によつても知らるゝ如く、琉球の行政は當時の日本官用文である候文で運営されてゐたのであつた。従つて必要上、支那留學生に對して、それより大多數の留學生が稽古人と稱して薩摩に送られた。僧侶も醫者も其の修業地は薩摩であつた。醫者が薙髮して居たのも日本の眞似である。在番奉行の下に幾多の薩摩武士か定在してゐるのみならず、薩摩の商人もどしどし移住しゐる。

言語も風俗も薩摩化せざるを得ないわけである。

「然者唐歌の儀御公界向に相係る藝にて御座候故無斷絶致相講候様被仰渡置趣も有之候處、稽古仕人無之由何共不可然候：云々」

の唐歌奨勵の訓令が明和五年に發せられてある一方に、前述の如く唐人滞在の砌は大和歌を歌ふことを嚴禁する程に庶人の口に日本の唄は上されてゐるのである。

是はよく琉球の日支兩文化の關係を現はしてゐる一適例である。既に序説の終りに結論を先づ述べ置きし如く、支那の文化は上流階級の儀式典禮の如き裝飾的方面に採用せられ、當局の保護奨勵によつて人爲的に維持發展（其の多くは衰滅したが）されたが、日本の文化は必要上、止む事を得ず、若くは自然に日常生活より政治の機關方法に至るまで社會上下に瀾漫浸徹した事の遇然ならざる事が、此の國の史的過程を辿つて、なる程と點

頭れるのである。琉球の教育は、かくの如き文化の土壤に芽生え、花咲き、實を結んだのであつた。日支兩文明のかくの如き關係を背景として琉球の教育は七百年の道程を歩いて來たのであつた。

三、琉球過去の教育

第一期。人類社會のある所、必や或程度の教育的過程がある筈である。南海に僻在してゐる此の島にも遠い昔から或る程度の教育はあつたらうが、文書の徵すべき物が毫もないから、唯あつたであらうと想像する外云ふべき事を持たない。讀み書きの教育が何時頃から始まつたと云ふ事さへ、わからない。從來此の國に關する歴史には文字の起原を爲朝の渡來と云ふ傳説に附會してゐるのが多い。従つて文教の開源を此の時に發すとしてゐる。然し既に推古の御代から明かに我に朝貢往來してゐたとすれば其の頃より多少内地の文字

が傳へられぬ筈なく、且つ假令、文化の程度は内地に比べて非常に低いとは云へ、兎に角朝貢するだけの政治團體を形成してゐる以上は、多少讀み書きの教育の行はれぬ筈はない。しかし、我等の知り得る史實によつて本島の教育史を述べんには是非とも南北朝の元中元年（西曆千三百七十二年）中山王察度が明國の招諭に應じて臣と稱して朝貢した頃を其の曙光時代と見ねばならぬ。かの中山、山南の王子王弟等や臣下の子弟の國子監留學はまさしく我か應神の朝が百濟の經典を獻じ稚郎子の王仁に就いて傳習された事に比すべき本島教育史上の大事件である。儒教傳來の起原を此の時に發して琉球の教育は俄然として發展して來る。思ふに當時の琉球留學生は我が推古舒明の頃の遣隋使遣唐使に附いて行つた留學生同様、歸朝の後は重用せられ或は其の學んだ所は學徒を集めて傳へたにちがひない。殊に注目すべきは久米村移住の闕

人三十六姓の人々の教育事業である。世襲的に定められた通譯辭令を司る職業の必要上、子弟の教育に努めたにちがひない。従つて明代の教法が琉球人の見聞に直接觸れて漸々模倣さるゝに至つた事と思はれる。

將軍足利義政の時代に我が楠公にも比すべき中城城主護佐丸盛春が寇のため壯烈なる忠死を遂げた事實を見ると、彼には當時に珍しき大義名分の觀念氣魄が存して居た事が看取さるゝ。儒教精神の感化が文教傳來の後三十年にして早くも茲に現れた實例と見れば見られる。

かくして琉球の文教は薩摩と明との勢力の高低消長し行く一波一瀾に影響左右せられて兩文化の雜糅對峙せる社會に其の搖籃時代を過ぎして來た。實にかの慶長十四年の琉球征伐は薩摩兩勢力兩思潮の最初の大衝突であり、やがて又琉球教育史の搖籃時代を終るべき過渡期を劃すべき大事件

であつた

第二期 琉球征伐によつて兩勢力對峙の均衡は破られ、久米村の閩人が代表する支那思想は薩摩留學出身の僧侶稽古人が代表する日本思想に壓倒さるゝ時代に入つた。續いて明末清初の騷亂となつて支那との交通は二三十年間も中絶するやうになつたので益々日本思想の全盛時代を現出して來た。此の時代を代表する人物は羽地按司尙象賢である。彼は己の編纂した中山世鑑に爲朝渡來の傳説を採用して王統の大和武士に發することを國民に教へた。宰相となつては「仕置」と云ふ後世本島爲政治家の典範となつた政治的隨筆書を著して、其の内に日琉同祖説を發表してゐる。曰く「竊惟者此國人生初者日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五行五倫鳥獸草木之名に至る迄皆通達せり、雖然言葉の餘相違者遠國之上久敷通融爲絶故也、五穀も人同時日本より爲渡物なれば云

々」と。慶長の頃出來たと云はるゝ「喜安日記」にある「唐を祖母の思ひをなし日本を祖父とせよ」との兩屬的思想に比して如何に日本思想の勝を占めしかを此代表人物の残した筆の跡によつて十分想像でさるではないか。又同書中に凡そ士たる者は學文、算勘、筆法、謠、醫道、庖丁、馬乘、唐樂、筆道、茶道、立花等の内、孰か一つに熟達せなければ如何なる身分の者と雖も官吏に登用せぬと云つてゐる。筆法は所謂お家流の筆法である。學文は候文述作の技能である。算勘も醫道も庖丁も皆薩摩輸入の技能に屬してゐる。況や謠、茶道、立花の獎勵に於ては如何に當時の教育が日本の文物に傾いて居たかと思像できる。彼は清朝興起の時代に際し其の機嫌を損はず、一方薩摩には日本親善の態度を取りて兩屬の安全を彌縫維持しつゝ、農務林政其他の内治に盡悴したは勿論、文教に力を致し生涯の残り三年間は専ら教化事業に費したので

あつた。我等は不幸にして當時の教育的施設を具體的に説明し得る材料を有せないが、此の「仕置」の一篇によつて察するも當時の教育が殆ど日本の思想によつて支配されてゐたことは確かである。そして教育の事業に携はつた者は主として僧侶であつた事は久米村に残れる聖廟碑に「國中以僧爲師未崇祀孔氏」云々の文字あるに由つて知られる。當時の僧侶の主なる者は日本留學の者であつたが、其の外に日本の歸化僧や一時滞在のものも往々にしてあつた。豊太閤の紹介を以て來たと云はれる袋中和尙の如きは國王の信任篤く教化の上にも多大の効績を残した。寛永の頃、かの漢學で有名な文之和尙の高弟如竹が本島に渡つて國王の師となつてゐる。彼より先きにも文之和尙の同學の僧（或は琉人或は内地人）が大分居た。従つて、かの戰國時代朱學の泰斗、徳川時代の儒教の源流たる桂庵禪師の學風は夙に琉球を風靡してゐたの

であつた。殊に注目すべきは文之點が如竹によつて傳へられ、以後長く採用せられて文之點にあらざれば讀まなかつた程に琉球の教化は程順則等の清國直輸入の教育興隆以前に既に薩摩をとほして我が國の儒教思想によつて基礎を作られてゐたのであつた。向象賢は斯の如き時代に出て次ぎに來る黃金時代の準備に努めたと見られる。

第三期。此の時期は日本の元祿享保の盛時の頃を中心とする。支那では康熙の盛代に當り、兩強治世の文化の花が此國にも盛んに移植されて百花繚亂の春を現出した時である。兩文化の調和の高調に達した時である。上に蔡溫、程順則の如き大人物出で、下に幾多の天才を輩出した黃金時代である。玉城朝薫は日支兩要素を調和した劇詩を多く創作した。殷元良は今の有名なる一批評家をして清人の畫なりと誤らしめた程の清朝の風骨を帯びた畫をかいた。平敷屋朝敏は春海、濱臣さて

は秋成等に雁行するほどの流麗なる擬古文で「苦の下」若草「雨夜物語」等の隨筆的物語をかいた。萬葉の坂上郎女を偲ばす程の女詩人、恩納なべは琉語の和歌を以て奔放熱烈なる南國の情緒を述べた。かゝる時代に作られ且つ作つた當時の賢相蔡溫は徳川時代の文教に於ける家康に比すべく、程順則は實に林羅山にも擬すべき教育史上の重要人物であつた。

蔡溫は綱吉將軍時代の初めに生れて吉宗時代に活動した。彼は向象賢と違つて思想も素生も（久米村の産）支那系統の人で青年時代に福州で勉強した事がある。政治學者たる彼は遂に榮進して三司官（國務大臣）になつて多年蘊蓄の學識を發揮して此の小王國に儒教流の經綸を實行した。島津氏の許す範圍内に於て支那の文物制度を極力取り入れて三十六島の津々浦々までも教化せうとの理想を以て「縦令ば朽手綱にて馬を馳せ候儀同斷」

と云ふ程に慎重の態度で「政道の儀は夜白入精」したのであつた。彼の教化に對する思想は當時の國民教科書とも見るべき彼の著「御教條」に由つて略々知ることが出来る。此の書の内容は各役人、百姓、職人、商人の本分、孝行、尊宗、冠婚、夫婦、兄弟、子孫、親族、老人、下人、朋友に對する心得、養生、慎酒、節儉、迷信、葬祭等（原書の順序どほりにならべた）二十九條に別つて用意周到に書いたものである。其の内の一條を引いて彼が教育意見の一般を想像せよう。

一、子供素立候儀、家中題目（肝要）之勤候、幼稚之時より氣持、心持、言語、仕形之類能々入念教訓可相加候、尤見馴、聞馴之善惡次第にも可致變化候間是又能々可有心得候、大抵二十歳迄には子供善惡之差分可相定候、其内別而無油斷教訓專一候、家中之盛衰は子供之善惡次第罷成候儀何れも存知之前候、然處自分好之物に

は夜白入念、子供に付而は夫程之念力無之、輕重忘却之筋甚以不可然候、右之譯得と致了簡、相素立候儀可爲要務事。

彼の自叙傳に由れば當時の士族の階級にては七八歳から「王子以下親雲上迄人々之名集」や「米粉野菜衣服諸道具杯之名集」などを書いた肉筆の手本を習つたらしい。それから三字經で讀方の稽古をした。十四五歳迄に四書の素讀を終り、其から「讀書之師匠相離、講談（講義）之師匠に相附」いて講義を聞いたらしい。彼が朱子學を奉じて講學著書に努め或は王子の師傳となり或は制度の改定に従事し學校を興し風教を隆んならしめた點に於て、次ぎに述ぶる同時代の程順則と共に琉球教育史上の双璧と見るべき中心人物であつた。

程順則も亦久米村の人である。留學や使節のため支那に往く事前後四回。其の青年修養の時代の殆ど半ばを支那にて送つてゐる。従つて支那の

事情に精通し其の思想も趣味も全然支那式である。彼の作れる詩文は殆ど清人の作同様である。實に彼は琉球に於ける支那文化の普及に對して最大の貢獻者である。彼は後世、名護なご（彼の領地）の聖人と謳はる程學問德行を以て一代に重んぜられた本島第一の人物で、教化事業は彼の畢生の精力を盡した所であつた。彼が文教の普及、道德の鼓吹に努めた事は數ふるに遑あらざる程で或は典籍を輸入し或は王命を奉じて官制の改革に従ひ或は世子の侍講となつて儒學を講じ、或は多くの書を著して道を傳へたが就中、特筆大書すべきは明倫堂の建設と六諭衍義を私財を投じて上梓頒布した事である。後者は彼の江戸に上つた時、幕府に獻じた結果、室鳩巢の和譯本となつて海内に分布しか點に於て、我國の教育史と關係ある興味深き一事件である。

享保三年、彼は王に請ふて久米村の聖廟の傍に

學校を建て、専ら久米村の子弟を教育する所にした。是れ實に琉球に於ける學校らしき學校の權輿である。明倫堂と名けた。元來此の聖廟の初を尋ねると明の萬曆年間（信長秀吉時代）紫金大夫蔡堅なる者が孔子の像を描いて其家に祀り久米村中の紳縉を率いて拜せしめた事に濫觴して、康熙十一年（家綱時代）に始めて廟が建てられたのであつたが、四十六年を経て今や、學校が附設さるゝに至つた。明倫堂の教育は支那との交際通譯を職業とする久米村の子弟に限られた故に、官話と支那文の述作が最も重んぜられた。學科は經書詩文漢字曆法の五科であるが、五科ともに兼修するのではなく一、二科を選修するのであつた。久米村の子供は六七歳から二字話「三字話」「四字話」「五字話」等を教科書として専ら支那語を教へられ、習字も首里其他で行はれたお家流でなく、支那の法帖で習つた。かくて十五六歳になつて、明倫堂へ

入學を許されるのである。官話を重んずるが故に明倫堂でも「人中話」や「風流配」「自作藁」「自作藁」「寒徹骨」等の俗語小説が教科書として用ひられ「古今奇觀」なども盛んに讀まれた。

かくして明倫堂は明治初年迄續いて支那文化の源泉地となつて來たのであり、且つ八十年の後、首里に國學建設せらるゝ迄全島教權の中心となつてゐたのである。

第四期。寶曆年間（す那の乾隆年間）國王、尙穆大に儒學を尊崇し、學問を奨勵した。ついで立つた尙穆の孫尙溫こそは琉球教育史に特筆すべき英主であつた。即位の四年後（寛政九年）首里に官學を起すの議を久米村の太夫達に咨問した。是れは久米村が四百年來壟斷し來つた教權を政府の手に攝むべき前提であるから、久米村人の驚愕は非常なものであつた。陳情嘆願等様々の反對運動が行はれたが、首里政府はどしどし計畫の歩を進

めて、直ちに假教場が開かれる。同時に教授の選定任命がある。久米村の有し來つた教權に對する最後の大打撃は官生（支那留學）選拔規定の變更であつた。即ち、是まで全部久米村から選拔してゐたのが今回から首里より其の半數（二人）を出す事を宣言した。此等の大改革に堪へられずして、とうとう琉球史上有名な官生騒動なるものが持ちあがり、ストライキとなり、政府の鎮壓となり、首領連中の遠島入牢となつて、波瀾は納まり、やがて國學訓飭士子諭と云ふ公文が發表された。字句内容共に堂々たるものである。曰く「稽古之學校、天子曰辟雍諸侯曰伴宮皆所以興行教化、作育人材典至渥也自古以來未建伴宮典尙闕如、應建國學興教化育人材以臻美備、然現今國財未裕不遂興建之志、故舊官署權爲國學（中略）自茲以往無論名門與寒陋、如有積行勸學爲國宣猷者則雖布衣子弟我將擧而用之、或敗檢躰閑不遵月

訓者則雖貴族子孫我將退去焉……嘉慶三年
戊午九月

越えて二年に國學奉行が置かれ、王自ら海邦養秀の四字を大書して掲げ、人材養成を標榜した。其年國學落成して御評定所（内閣）から學生募集の廣告が出る。繼て教授が開始される。かくして琉球の教權は久米村から首府に移されたのである。時に今を去る百十餘年。

國學の概要を云ふと生徒を官話詩文生、講談生の二類に分つ。元來本學に入る者は既に村學校平等學校で素讀等の初等教育を受けてゐる者だから、直ちに四書五經唐詩合解等の教科書によつて講義を始める。入學を許さるゝ資格は「按司以下歴々之子弟、奉行、中取役へ可相進資格之面々」は平等學校修行の後、同校の奉行が學力を見檢べて推薦した者、及び平人（無祿の士）の子弟は奉行が學力乃至性質を前者に比して一層嚴密にしら

べて推薦された者に限る。學修期限は定めてないが概ね十八歳で入學し七八年間を経て退學する。

教育の方法など全く明倫堂模倣の支那式で、朱子白鹿洞教學や程董二先生學則を掲げて校訓としてゐる點や、校内に聖廟を建て、釋奠の禮を春秋に行ふなど、支那の書院や縣學同様のものではあつたらうと思はれる。但し茲に注意すべきは如何に教法が支那流にしても卒業生（別に卒業の期を置いてないが）の働く社會が日本文化の雰圍氣故「平人の儀は……學問一偏の勤めのみにも罷ならず、文筆（日本文）算術等相嗜まず候ては不叶事に候間、勝手次第に」勉強せよと命じてゐる。しかし時間がないため其後、學生違判で手跡文章算法の稽古のため長い夏季休業を請求して許されてゐる。一體琉球では按司以下歴々の方以外の平人（平民にあらず）の登龍門は科と云ふ文官試験であつた。科目は經書の訓點と實務上の作文（候文の公

用文)であるが、候文の練習は琉球青年の半生の精力を要求したのであつた。茲にも支那の文物は裝飾的表面的に、日本の文物は實際的裏面的に勢力のあつた事實の一例が現はれてゐる。

國學の下には平等學校と云ふのがあつた。首里の眞和志、南風、西の三「平等」(區)に各一校づゝあつた。國學の假教場の設けられた寛政十年の創設に係る。教科目は小學四書の講義(素讀は既に村學校ですましてゐる)五經の素讀の外に習字算法もある。講談師匠、文筆師匠(習字)算術師匠各一人讀書師匠(素讀)二人の教師があつて、生徒は村學校修了者で十五六歳で入學する。是も卒業の期限はないが、大抵五六年で退學する。

村學校は平等學校の創設に後るゝ事五年にして享和三年に泊村に始めて開かれた。ついで首里、那覇にも出來て維新前後には二十一校あつた。首里にあるのは七八歳で入學し、十四五歳で退學す

るか、那覇と泊とは少年部、青年部の二部に分れ、青年部は平等學校と同程度である。是も卒業の期限なく、大抵二十一二で退學する。教科は三字經小學四書の素讀と習字である。

琉球教育の一大缺點とする事は被治者の教育機關の絶對になかつた事である。従つて中央都市附近外の地方には殆ど學校は無かつた。只あつたのは村吏養成の筆算稽古所のみである。各間切(一)個づゝで、創始の年代はわからない。教科目は低度の讀書算で即ち平假名より人名書、野菜名寄、御教條、六諭衍義等が教へられる。是も卒業の期限はないが、掟と云ふ最下の村吏にして貰へば退學する。村吏志望者ならば誰でも入學できるが多くは村吏の子弟で、年齢も何の制限もないが、大抵十一二より二十七八歳までで、教師は「お師匠」と云つて、大抵世襲俸給は村費で一年米二石五斗別に一ヶ月五人の附夫(力役)が給せられる金に

換算される事もある。

大體、以上のやうな教育機關を持つて明治初年まで續いて來たのであつた。

四、結論

思ふに琉球の文化は屢云つた如く、日支兩文化に影響扶助せられて特殊の發達を遂げたが、しかし其は貴族の文化、支配階級の文化、若くは一局部に偏した文化であつた。換言すると首里那覇の小文明であつた。従つて教育も地方迄普及せず。

此の小國の治者階級のみ極めて小範圍に行はれたもので、教科書の多くは寫本で濟すまされたのを見ても其の規模の小さかつた事が想像できる。然し、より強大な、より進んだ異種の兩文化を隔離した一つの場所に注ぎ込んでそこにどんな發達をなすかを我等に示した一つの文化史の小さい珍しい鵜形であつた。そして、此の小さい鵜形の國の

教育にも兩強の政教の一弛一張の影響が此國の指導の任に當る人物の賢否と相待つて一盛一衰を積み重ねつゝ漸次特殊の發達をして來た跡や、さては他の大國の教育史に見る如く大學から小學へと上から下への學校發達の過程の鵜形が見られるのは實に興味ある事である。然し、明治維新の大波瀾は此の南海の絶島に迄、大影響を與へて、此の小國の特殊の文明を根柢より覆へくがしてしまつた。そして此の面白き鵜形の面影は年々歳々忘却隱滅のこぼれに吞まれ行きつゝある。以上述べ來つた教育制度も、明治十二年三月二十七日廢藩置縣と共に全く廢せられて普通教育制度に代へられ、爾來四十年。長く／＼一階級に壟斷されて來た教育恩恵は今や左衽跣ひらの(實際然り)の佝夫漁者の子にも學習院の生徒同様の國定教科書が教へらるゝに至つた。八重山島の村夫子の口よりもオイツケン。ベルグソンの名が唱へられ、モンテツソリー。

モイマン。リンデ。ケルシニンシユタイナー。の學說が喋々さるゝに至つた。殆ど内地同様の發達を呈した琉球教育の現状を目標しては過去數百年の傳統ある文化乃至教育が効果ある水底の棄石となつて横はつてゐる事を思はざるを得ないのである。

(終り)

(本稿に叙述せる史實に就ては沖縄圖書館長伊波文學士、同館員眞境名氏の援助に候つものが多い、是に感謝の意を表して置きたい)

彙報

一一八

心理學讀書會例會

十一月十八日、午後三時より實驗場内演習室に於て、開會左の二氏の講演ありたり、

○教育と心理學との關係

福富一郎君

○宗教的意識の心理的要素

石神徳門君

福富氏の講演の大意は左の如くである。

發表者は其最初に於て、此報告が自分も満足する事は出来ない粗笨な見渡しに過ぎないと、尙此後一層根本的に考察せんとする意志ある事とを斷つた。其内容は二部に分れ、(一)現今教育者の心理學に對する態度を觀察し、(二)教育と心理學との交渉如何を決定する爲めに、兩者の關係を否定する見解を吟味し、其議論中から教育心理學の性質を誘導し併せて教育實際家の之に對する態度を論じた。(一)此態度には二種あつて、一は、心理學の教育に對する價値を過大視し其結果心理學に信賴し過ぎるもので、他の一は心理學を蔑視し無用視するものである。前者は、ライに提唱せられイモンによつて高調せられ、後獨、佛、殊に米國に於て盛に研究せられてゐる。實驗教育學並びに教育作業の心理學的研究に對する、教育實際家の反對である。即ちゼエムスの『教師への警告』は能く之を辯じてゐる。後者の態度を取るものには大體四種ある。一は教育思想界には一時流行的思想と教育の實驗的心理學的研究とを同視するもの、第二は、心理學上の智識が教育學に對して畢竟